

2005年度 森村・川村ゼミ グループ発表

岩永智典・豊島典明班

2005年11月2日

1. はじめに

今回私たちは、これまで4週にわたって学んできたフルクサスと同時代的な日本の前衛芸術運動のひとつとして〈グループ音楽〉、およびその中心人物の一人である刀根康尚の活動をとりあげる。グループ音楽が結成される1960年代初頭の日本は、高度経済成長により豊かな生活をもたらされ始めると同時に、科学技術の飛躍的な発展によって私たちの生活環境も変容を見せ始める。その当時の日本のいわゆるアンダーグラウンドな動向を見渡すと、アンデパンダン運動を皮切りに、単に「芸術活動」とは言い切れない様々な反体制的な活動が行われていた。その表現スタイルや動機は多種多様であるが、その根底には何か通じるものがあるように思える。その活動拠点ともいえる草月アートセンターでは、その何かに突き動かされた作家たちによって次々と実験的パフォーマンスが夜な夜な繰り広げられた。彼らを突き動かしたものは一体何であったのか、これが今回の私たちの問いのひとつである。

またグループ音楽の主要メンバーであった小杉武久や水野修孝は今現在もその趣向は異なるものの現役で各々の音楽活動を続けている。その中でものグループ音楽以降の活動は大変興味深いものがある。というのもその主な作品(パフォーマンス)をたどってみると、それらは60年代のグループ音楽で行っていたようないわゆる「即興」と呼ばれる音楽的趣向とは似て異なるものであるからだ。彼自身の中に何か変化があったのか、あったのだとすればそれは一体何なのか。

2. 1960年代から70年代初頭の社会背景

【社会の動き】

・戦後経済の急成長

平和的な民主国家建設の夢

人々の生活レベルが急速に「豊か」に

ex)大阪万国博覧会(1970) → 当時の「豊かさ」の象徴

・反体制の時代

アメリカに「押し付けられた」政治システムに対する反発

ex)安保理闘争 日米安保理の改訂を巡り、学生運動が激化(1968-69)

【芸術界の動き】

※反体制・制度の精神が芸術の世界にまで波及

・制度論の高まり

様式や、感情までも「統治」とされた制度に対する不信感

・「芸術とは何か？」から「何が芸術を芸術たるものとするのか？」へ

3. グループ音楽とその周辺

■最初で最後のリサイタル

「グループ音楽」第1回公演 「即興音楽と音響オブジェのコンサート」

とき:1961年9月15日

場所:草月ホール

プログラム:

1. 水野修孝 「金管群のための3つの次元」「テープ音楽」
2. 塩見千枝子「モビール I II III」
3. 刀根康尚 「磁性テープによるピアノ的音響」
4. 戸島美喜夫「M-C.No.1」
5. 拓植元一 「テープのための音楽」
6. 小杉武久 「OS-3、1961」
7. グループによるインプロヴィゼーション 「メタプラスム・9-15」
※出演＝水野修孝、塩見千枝子、刀根康尚、戸島美喜夫、拓植元一、小杉武久、北村昭、八村義夫、日本フィルメンバー、…他

○〈集団による即興演奏〉がもつ匿名性 → 伝統的な概念から自由な演奏

○音によるオートマティズム→ 「再現」することへの抵抗

○音を目的化しない → 今そこでもっている物体(楽器)と行為との緊張関係が問題
EX.「オーガニック・ミュージック」 performed by 小杉武久

○小泉文夫とジョン・ケージ

・インド音楽…実体は動的なもの ⇔ 西洋音楽…固定化されたもの(記譜)

・ケージの不確定性

↓

即興演奏による音楽の実体の具現化

■EXPOSE '68 「なにかいってくれ、いまさがす」

・「EXPO '70」;大阪万博への意識

・時代環境にともなった実験的態度

・芸術作品の環境化への意識

4. 刀根康尚(グループ音楽からパラメディアへ)

刀根の作品は時代の経過とともに、その「アンチ」の性質が変化をしていく

↓【グループ音楽】(1960年代)

↓・オートマティズム(音による無意識)

↓・既成の技法の打破

↓・作曲における専門性の否定

↓—大阪万博(1970年)

↓【パラメディア】(1980年代以降)

↓・レディメイド

↓・破壊ではなく、新たな文脈の創造

↓・変形的な使用により新たなメディアになる可能性のあるもの

↓・テクノロジーの積極的な利用

↓

ex)SOLO FOR WOUNDED CD (1997), PALIMPSEST (2004)

5. 考察

発表の冒頭でも述べたように日本の60年代は高度経済成長に伴う科学技術の発展によって様々な表現活動が実験的に試みられた。それらは絵画、映画、音楽といった各分野の垣根が取り払われたものであり、「インターメディア」ということばがちょうどこの時代に日本でも用いられていることもそれを説明してくれる。ここまでに度々触れてきたように、当時の人々を突き動かしていたものは反体制の気質に根ざしたそれまでの制度を超えようとする実験的精神であった。

しかしその一方で68年のシンポジウム「なにかいってくれ、いまさがす」において、様々な分野で活躍する人々が、当時の状況断面をズバリ切断し明らかにしようとしたことは、その当時から見た「芸術的」可能性を展望すると同時に、彼ら自身の抱える問題を浮き彫りにしているように思える。彼らの根底にあった反体制の姿勢に縛られたままでは、新たな創作活動を行い得ないということに彼ら自身が気づき始めていたのではないだろうか。そのことは草月アートセンターが「ハンパク」運動の標的にされたことからわかるだろう。「反芸術は大阪万博に収斂した」と語る刀根康尚自身も、大阪万博に向かいつつその問題を意識していたのだろう。その後アメリカに渡った彼はフルクサスの活動にも関わりつ

つ、徐々にそれまでの「アンチ～」の精神とは趣向の異なる表現活動を行うようになっていく。比較的近年の作品である「Solo for Wounded CD」にしても、それはレディメイドのスタイルを用いることで依然としてダダの影響の片鱗を見せてはいるものの、そこにはダダやシュールレアリスムのような破壊的な志向を読み取ることはできない。彼自身のことばを用いればそれは「破壊」ではなく「アディション」であり、既成のメディアからその新たな使用法を創造することが今の彼の活動の動機だと言えそうだ。

【重要人物・用語集】

暗黒舞踏派

1956年結成。身体の奥深くに刻みこまれた肉体の属性、土俗的なもの、呪物めいたもの、神的なものなどを、舞踏によって救い出し、現代芸術の1つの突出物をなすものまでに高めたのが、土方巽を中心とする暗黒舞踏派の数々の催しであった。彼らもまた草月ホールでの公開にともなって、現代美術、現代音楽との交流を深め、中西夏之、加納光於などの美術は、土方の暗黒舞踏には欠かすことのできないものとなっていった。

オートマティズム

フランスのシュールレアリスム運動のなかで提唱された手法。理性や既成概念にとらわれず、浮かんでくることを自動的に次々と速記し、意識下の世界を表そうとするもの。自動記述法。

草月ホール

1958年9月、丹下健三設計による草月会館が東京赤坂に誕生した。同時に創設された草月アートセンターは、この会館を拠点にして、現代音楽やハプニング、映画、演劇、など多様な催し物を取りあげ、さらにそれぞれのジャンルをクロスオーバーさせて1960年代の前衛の実験の場を提供し続けた。1977年には再び丹下氏の設計により新草月会館として建てかえられた。

ゼロ次元

〈ゼロ次元〉とは、人間の行為のさまざまを可能な限り同時に并存させ、行為をゼロ時間の無為へと導くハプニングのための集団。騒々しく性的に立ち回って、日常性をひっかきまわす「儀式」屋集団をさす。

フィルム・アンデパンダン

1964年9月に結成された〈フィルム・アンデパンダン〉は日本にアンダーグラウンド・シネマをもたらした最初の試みといえる活動、およびグループをさす。飯村隆彦、高木陽一、大林宣彦、金坂健二らがその主なメンバーである。

読売アンデパンダン

正式名称は「日本アンデパンダン展」。49年の発足以来東京都美術館を会場として、63年の第15回展まで開かれた。

ルナミ「インターメディア」

フルクサスのディック・ヒギンズによって提唱された「インターメディア」ということばと概念が1967年5月、ルナミ画廊で初めて導入された。

EXPOSE '68 シンポジウム 「なにかいってくれ、いまさがす」

高度経済成長、科学技術の飛躍的な発展が芸術の新分野にさまざまな問題を提起する。そうした時代環境と新たな芸術のありようを模索する試みが、1968年4月に草月会館で5回にわたって、草月アートセンターと『デザイン批評』による共催で行われた。報告、討論、詩朗読、即興演奏、マルチプロダクションやマルチスライド、ドラマ、即興絵画やハプニングなど構成と表現のありようは多様を極めるが、それは万博前夜の混沌とした表現状況の反映でもあったとも言われる。

第1回「変わった？何が(現代の変身)」(4月10日)

1. ジェフリー・ヘンドリックスの演出による「ブルー・ボックス」—柳慧・横尾忠則・黒川紀章の構成
2. ザ・ハプニング・フォー、内藤マコ・浜野安広出演によるサイケデリック・ショウ「サイコ・デリシャス」
3. 詩朗読＝飯島耕一
4. 討論＝中原佑介(報告)、黒川紀章、一柳慧、横尾忠則
出演＝高松次郎、刀根康尚、塩見千枝子、総司会＝泉真也

第2回「俺たちはみんな気狂いピエロだ(衝突とは)」(4月15日)

1. マルチプロジェクションによるシネマ・モザイク「つぶれかかった右目のために」監督＝松本俊夫、撮影＝鈴木達夫、音響＝秋山邦晴、制作＝工藤充
2. 8つのプロジェクション・デザイン「ホリデー・オン・プリント」構成＝栗津潔
3. 詩朗読＝長谷川竜生
4. 討論＝松本俊夫(報告)、今野勉、秋山邦晴、栗津潔、原広司、総司会＝泉真也

第3回「暴力と恍惚(行動の所有)」(4月20日)

*プログラム省略

第4回「蒸発のすすめ(虚像と実像)」(4月25日)

1. 映画「椅子を探す男」監督＝黒木和雄
2. 「サウンドディスプレイ」佐藤慶次郎作

3. 「シルクスクリーンによる雲隠れの術」唐十郎、大久保鷹ほか状況劇場出演
美術構成＝山口勝弘
4. 詩朗読＝白石かずこ
5. 討論＝東野芳明、高松次郎(報告)、羽仁進、唐十郎 総司会＝泉真也

第5回「あすはあっさつての日が昇る(未来の構想力)」(4月30日)

1. 「ルルー」坂本正治作
2. 詩朗読＝大岡信
3. 討論＝川添登(報告)、小松左京、磯崎新、中原佑介 出演＝松本俊夫、針生一郎、東野芳明 総司会＝泉真也

小杉武久(こすぎ たけひさ)

1938年東京生まれ。60年代初め、「フルクサス」に参加し数多くのイベント作品を発表する。69年「タージ・マハル旅行団」を結成し、様々な場所で演奏を行う。77年アメリカ移住以来、「マース・カニングハム舞踏団」の作曲家・演奏家として活躍するとともに、個人としてもテクノロジーをしなやかに使いこなした独自の表現で、世界各地の芸術祭、コンサート、展覧会に数多く参加している。

小泉文夫(こいずみ ふみお)

1927年に生まれ、1983年に没す。音楽学者。クラシック音楽を専攻する多くの音楽家や音楽学者が、いわゆる「第三世界」の音楽を「クラシック音楽よりも品格が低いもの」とみなしていた当時から、それらの音楽を積極的に評価し、日本国内でも積極的に紹介した。とりわけ日本の歌謡曲を精緻に分析した『歌謡曲の構造』は、「小泉理論」を知るための恰好の入門書だといえる。小泉文夫の影響でアジアの伝統音楽に関心を持つようになったミュージシャンとしては、坂本龍一、細野晴臣などが挙げられる。

水野修孝(みずの しゅうこう)

1934年生まれ。千葉大学卒。小泉文夫に師事する。初期の「オーケストラ1966」や「声のオートミー」では、図形楽譜の指示等による奏者の自由に任される音響を全体的に制御しクラスター処理するといったように、当時の最前衛の影響を比較的容易な手法で表現する感覚に長けていたが、近年では過去の音楽への回帰が顕著に現れている。

刀根康尚(とね やすなお)

1935年東京生まれ。千葉大学卒。グループ音楽の活動後、新しいタイプの音楽家として図形楽譜による作品やイベントを発表、注目される。ハイレッドセンターの発足以来の顧問でもあり、千円札裁判懇談会のメンバーとしても活躍。また評論執筆の機会も多く、美術手帖をはじめ数多くの執筆をこなしている。童顔に不精ひげがよく似合い、トップモードを着こなすプレイボーイ、ダンディスト。

【参考文献・ウェブサイト・CD】

文献

- ・暮沢剛巳編 『現代美術を知るクリティカル・ワーズ』（フィルムアート社、2002）
- ・小杉武久著 『音楽のピクニック』（水声社、1991）
- ・奈良義巳 野村紀子 他編集 『輝け 60 年代 * 草月アートセンターの全記録 *』（フィルムアート社、2002）
- ・藤井明子編 『yasunao tone』（愛知芸術文化センター企画事業部実行委員会、2001）
- ・ホアキン・M・ベニデズ『現代音楽をよむ エクリチュールを超えて』（朝日出版社、1981）
- ・清水哲朗 「1960-1970 反体制と反芸術 価値の反転」、『美術手帖』、2005 年 7 月号
- ・刀根康尚 「芸術の地殻変動-EXPO からヒッピーまで」、『美術手帖』、1967 年 11 月号
- ・中原佑介 「環境芸術」、『美術手帖』、1967 年 6 月号
- ・松本俊夫 「ヴェンダービークとその周辺-エクспанディッド・シネマの展望」、『美術手帖』、1969 年 8 月号
- ・Philomena Mariani, *Global Conceptualism: Points of Origin 1950s-1980s*, New York, Queens Museum of Art, 1999
- ・Yuzo Sakuramoto *MUSIC no.1*, New York, TAMAGO, 1997

ウェブサイト

- ・水野修孝公式ホームページ: <http://www.shukomizuno.net/>
- ・アートスケープ 現代美術用語集:
<http://www.dnp.co.jp/artscape/reference/artwords/index.html>
- ・はてなダイアリー: <http://d.hatena.ne.jp/keyword/>

CD

- ・Yasunao Tone 『Solo For Wounded CD』（TZADIK 1997）
- ・Yasunao Tone & Hecker 『Palimpsest』（Mego 2004）